

退校、藤田兵曹他二十四人にて、東京海軍通信隊付を命ぜられ、即日入隊。十八日、第十二航空艦隊司令部付を命ぜられ、午前退隊し、単身常磐線經由。二十日、千歳基地着、第十二航空司令部に入隊。十月七日、第十二航艦司令部退隊し大空に向かいました。

同月八日、大湊航空隊に入隊、九〇三空です。十一月一日、任海軍二等兵曹、同月四日、大湊海兵団に派遣を命ぜられました。初任下士官教育のためでした。十二月四日、復帰を命ぜられ、現役満期でしたが、下士官に任官していたため、二年間再現役となりました。同十五日、第九〇三海軍航空隊付となり、大湊派遣隊勤務を命ぜられました。

昭和二十年一月一日、普通善行章一線付与。四月二十三日、九〇三空、稚内基地付となり、二十四日、基地着、設営作業をする。五月一日、飛行隊は進出せず。六月三日、遠洲基地派遣を命ぜられ、稚内基地発、基地設営後、各種訓練、対空。ソ連参戦のため、作戦準備中、八月十五日、終戦。八月二十一日、基地発。

二十二日、軍艦大泊にて稚内基地に入る。

九月一日、「任、海軍一等兵曹」現役満期、復員す。思えば、乗船する軍艦がなくなり、だんだんと北方の勤務になり、最後は樺太でした。

強運だった海軍志願下士

福岡県 志坪 十郎

大正十二（一九二三）年二月十日、福岡県京都郡泉村に農家の三男として生まれました。

泉高等小学校を卒業すると、八幡市にある母方の製缶工場で見習修業をしていたのですが、一年で家に帰り、小倉の陸軍造兵廠へ入所しました。ご承知とは思いますが、造兵廠という所は兵器・弾薬等を製作する、重要な国の施設（大工場として有名）であります。以前製缶工場にいた関係もありますので、工作機械等は縁もあり、その若干の経験を生かされてか、砲弾製造の旋盤工として二カ年働いておりました。

しかし、その頃になると、支那事変も長く続き、国内も非常時とか言われながら、戦時色も濃厚になってきました。特に、私も兵器製造に関係している者にとっては、戦争とは切っても切れぬつながりを持ち、情報も入り、やがては兵隊にならねばならぬ、兵役の義務について考えていました。

その頃、同僚達の中でも、徴兵適齢期（二十歳）になり現役入営する者も多くなり、また民間の職場にあった人で、補充兵として召集される人々もだんだん多くなってきました。私は、仲の良い友人と話し合いい、どうせ、いつか軍隊へ行かねばならぬならと、役場などにある志願兵募集のポスターに引かれていたのです。

そのため、友人と二人で海軍を志願しようと話し合いました。家に帰って家族に話をする、父は反対でした。しかも「私は三男なのだから、軍人となって」と、父を説得したのです。父とすれば、戦争になれば、戦死・戦傷することも多分にあると、内心反対

していたのですが、三男坊の私、特に農家を継ぐ立場にない私の希望を、渋々ながら了承し、「志願届」に印を押してくれました。家長の決定には家族も同意するの、当時の、特に九州の習わしのようにでした。

私等は、昭和十六（一九四一）年九月、（海軍の志願では、十六年後期の志願）行橋で試験を受け、合格しました。ところが、戦争終わってから恩給の問題で、年令恩給受給資格は、一般的には十六年前期は（加算を含め十二年）、後期の者は十二年未満という、恩給受給の境になった人が多かったのです。

そんなことはもちろん、当時は知る由もなく、今でも私は、在職十二年未満ということで、一時恩給のみ、年令恩給資格なし、ということでもあります。

私の兵科は主計の衣料科という予想もしていない仕事でした。鎮守府は佐世保であり、海兵団も佐世保海兵団、海軍の兵隊は、基礎的なことは海兵団で学ぶ、訓練を受けるのです。陸軍でいう一期の検閲までの教育訓練と同じようなものであったのです。

海兵団で三カ月間の訓練教育を終え、現地入隊は朝鮮鎮海海軍航空隊でした。毎日、烹炊作業に精を出す、農家―製缶―旋盤工という体験・職種の私にとり、料理の割烹、包丁や煮炊きのことなど、まったくの無経験、無知識ですから、毎日のように先任者に叩かれる。耳の鼓膜も破られ、毎晩、バットという槌の棒で尾底骨を叩かれ、しりは青紫になってしまふ。軍医には「コケた」と言わなければならぬ。「叩かれました」など、本当のことを言ったら、腕立て伏せの上に六〇キロの「かます」を乗せられる。一人でも悪いことをすると連帯責任、「気合いが抜けている」と言つて軍人精神を叩き込まれる。例の槌のバットで叩かれるのである。

そのかわり、陸軍より良い所もある。陸軍のように、上官や上級者に、いちいち敬礼はせぬ。無礼講の時もあります。海軍は、一人の不注意やミスにより軍艦全部が沈むこともあるから、連帯責任をやかましく教育される。だから、体で覚えさせられるのだと言われています。陸も海もなく、新兵の時は大変です。

鎮海に本部であるので、我々は各航空隊に派遣され、元山や済州島へも行きました。現地では物品の直接購買もする。単独責任であり、助手は三等水兵である。直接購買の時は帳面に書いて鎮海の航空隊本部へ送ればよいのですから、その責任は重いものでした。派遣期間三カ月が終了し、鎮海へ帰りました。

その後、海軍経理学校へ三カ月派遣され、東京の品川へ行き、学科・衣料・料理・物品・屠殺場（当時品川駅の裏の方にあつた）、毛織物・菓子工場等の見学。洋食・中華・和食等の実習もあるが、これは、種類も多くて一番難しかった。

次は、献立表作り、カロリー（一日、四八〇〇キロカロリー）、青野菜、缶野菜と積算するのだが、海軍の食料は、一般的には陸軍と比べても良かったと思えます。その他に、航空・潜水艦料食もあります。

教育を受け、一人前になった者は、学校を出て、服の腕に山形の徽章を付けることになるわけです。私は一年で進級でしたが、改正になり、昭和十八年三月には三カ月で進級し、三等―二等―一等そして、陸軍と

同様の兵長の階級もできました（海兵団は訓練中四等兵であった）。

本隊に帰り、烹炊員長並びに衣料長となりましたが、練習生の試験を受け、經理から衣料の方へ行けと言われ、私も海軍經理学校に進みました。昭和十八年十二月卒業、航空母艦「雲龍」乗艦との事でしたが、令により「第三十五魚雷調整班」に行くこととなりました。横須賀海軍航空隊須崎分遣隊は、四鎮合同隊（私は佐世保）となり、私達部隊は第一航空艦隊配属となりサイゴンに直航し、さらに南方に行くことになり、夏用の第三種軍装を佐世保で受け取りました。

ところが、呉より出航予定は変更され、門司より出港となり、貨物船「新洋丸」に乗船となりました。しかし、「台湾海峡に敵潜水艦あり、全船島陰に待避せよ」の命令がありました。「新洋丸」船長は出港時間一時間を間違ったお陰で、結果的には、我々は九死に一生を得たのです。

話はちょっと、元に戻りますが、横須賀須崎分遣隊

で編成があった時、我々陸上の者は、第一希望で艦船希望としたのですが、私は、空母「雲龍」には行かず、私の代わりに行った者は、沈没戦死されたと後に聞きました。このことも、私は九死に一生を得る。まさに「軍隊とは運隊」でした。

「新洋丸」は出航後、情報通り敵潜水艦の魚雷攻撃を受けました。護衛艦の旗艦は、巡洋艦「香椎」でしたが、「新洋丸」が受けた魚雷二発は、機関部には受けず航行に支障はなく、護衛艦が潜水艦を攻撃したので、無事マニラ湾に入港することができました。

マニラ港では、沈没艦船のマスツが水面に林立しているという、凄まじい光景を見ました。我々第三十五魚雷調整班は、これ以上南下できぬという。「新洋丸」は魚雷を食ってしまったので、我々は、商船に乗り台湾へ行くことになりました。先に申しましたように、我々はさらに南へ行くのであり、マニラは寄港地に過ぎなかつたのです。

我々はまず、台湾へと出港しましたが、これより南下することができず、台湾高雄港に上陸し、新竹航空隊に到着しました。魚雷調整所は、十八先山に置き、整備しては運搬していました。

昭和二十年二月、台湾には大空襲があり、B 29、B 24（コンソリテッド）、そして、グラマン戦闘機が大挙して来襲しました。そのため、兵舎はやられたので、我々は砂糖黍畑へ逃げ込み助かることができず。しかし、反対側へ逃げた者は皆やられてしまいました。その惨状は、目を覆うものでした。体の肉も骨もバラバラ、首も飛び散る、爆風で服は脱げたが、不思議と禪の紐は切れていませんでした。その時の無残な姿は今でも目に映り、消えません。

その後、第一航空艦隊より、第二航空艦隊に移りましたが、十八先山の防空壕におりました。八月十五日、終戦となりましたが、台湾総司令の指揮管轄命令により、「台湾軍は戦闘を続行する」という命令が下りました。

そのため我が部隊は、六十キロ爆弾を解体して、手

榴弾のような物を作っておりました。その時、誰かが誤って爆発させてしまい、二十人の戦友が亡くなったのです。その場所は、魚雷調整所の防空壕の前でした。この事故は、終戦間もない時でしたし、徹底戦闘という命令もありました関係からか、隊長や、主計長が戦死と認めて報告したようでした。

その後は宜蘭航空隊に入り、地名・スオウという所にある高砂族の寮舎で自活生活をせざるを得ませんでした。航空隊から米をもらい、被服ももらい十人で自活をしていました。その後、中国軍が来たのですが、菅笠を被り、靴もなし、電気も知らぬということでしたが、中国兵とは、同色、同文とでもいうか仲よく生活をしました。

その後、ようやく全員帰還の命令が下り、我々は基隆港に集結し、駆逐艦「茅」に乗艦して、昭和二十年三月、鹿児島港に上陸、検閲を終え復員、故郷に帰りました。

海軍を志願し、はからずも經理、烹炊、衣料という、裏方の軍人として過ごしたのに、何か心苦しいものでありましたが、その裏方こそが、補給こそが、戦争で大切なものであったことを戦後つくづく知ることができました。米軍と日本軍の重点の置き方が違い、そのための敗戦だったと感じたものでした。

戦後、八幡製鉄へ勤めたのですが、志願現役海軍兵であったためか、レッドパージとなり採用中止となりましたが、その後、解除となり、二回目によりやく入社したという体験もありました。

しかし、私の人生、特に軍隊においては何回かの幸運に恵まれ、死を免れて、現在まで健在であることは幸いです。まさに、誰でも言う「軍隊は、運隊である」ということを、今も心の底で感じ、強運を感謝しております。

【解説】

魚雷調整班は航空隊または艦船に供給する魚雷の調整に関することを主任務とし、番号を冠称し、基

地航空の航空艦隊または艦船部隊、官衙内に置かれた。

航空艦隊に付属した班は航空魚雷の調整整備に関するをつかさどり、飛行機用雷撃兵器の整備をつかさどるものは、所在または所在地付近の航空基地の雷撃関係施設と、同兵器の整備保管及び航空隊または飛行機の作戦と教育訓練に関する業務を補助することを任務とした。

魚雷調整班の編制標準は編制を甲、乙（更に大と中に区分）に区分し、甲編制は人員七五人、艦船用魚雷兵器の調整整備を、乙編制は飛行機用雷撃諸兵器の整備を主任務とし、乙の大は人員三一九人、乙の中は人員一七八人を標準とした。

魚雷調整班の編成数は昭和十七年六月十五日、初めて三個班編成、八月十五日付GF編入、その後、昭和十七年度中に四個班、十八年度中に五個班、十九年度中に二二個班、二十年度中に一九個班、合計五三個班。このうち乙の大は一個班、乙の中は一個班。